

英国における Synthetic Phonics の取組 —英語学習導入期における教育実践の現状—

湯澤 美紀^{※1}・山下 桂世子^{※2}

The Synthetic Phonics Approach to Young Children's Learning English
Letters in the U.K.

Miki YUZAWA and Kayoko YAMASHITA

This article deals with an approach of synthetic phonics adopted in the National Curriculum in the U.K. Synthetic phonics is a teaching method that children can read and write more efficiently. In the approach, children are encouraged to recognize sounds with multi-sensory activities to blend these sounds together to read a word. Jolly phonics is fun and child-center approach adopted by many primary schools in the U.K. This article overviews the National Curriculum historically in terms of phonics for reading, and reports the purposes and aims of English education for the key stages 1 and 2 in the National Curriculum in 2014 and offers sample activities of the foundation stage in “letters and sounds” in 2007. Then, based on a class observation in May in 2014 at a primary school adopting the Jolly phonics method, three different types of English activities were reported: an activity of a class of foundation stage, an activity of a small group for children of foundation stage who were disadvantaged in reading, and an activity of individual daily supports for two children of Key Stage 1 with special educational needs. Finally we discuss the possibility that Japanese primary school children would undertake English activities using phonics in the future.

Key words : Synthetic Phonics, Phonological Awareness, English Education

I はじめに

平成 23 年度、学習指導要領の全面実施に伴い、小学校 5・6 学年において年間 35 単位時間の「外国語活動」が必修化された。

現在の「外国語活動」の指導目標は、「外

国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」ことであり、必ずしも、英語に特化し

キーワード：シンセティックフォニックス、音韻認識、英語教育

※1 本学人間生活学部児童学科

※2 Ashbrook School

たものではなく、コミュニケーションと文化理解を中心とした活動となっている。

一方で、現在の「外国語活動」の文脈において、小学校高学年における学習意欲の低下が指摘されているが、先進的な学校の取組において、文字学習を導入した場合、学習意欲の向上が見られたことが報告されている（文部科学省有識者会議 平成 26 年 8 月 8 日）。

君塚・西尾・田中（2010）は、現行の「外国語活動」における「文字不要論」の由来を、『小学校英語活動実践手引き』（文部科学省）を参考にしながら、考察しているが、母語以外の言語に触れながら、コミュニケーションの道具として言語に関する確かな学びを行っていく上で、「文字」を避けることは難しいのではないかと筆者らは考える。「文字」は、音声を記号化したものであり、母語以外の音韻認識を高めていくためには、音声を識別する記号として、また音声を長期的知識として習得するための記憶の手がかりとして、その果たすべき役割は大きい。文字を学習することによって、学習意欲が向上した理由の一つは、文字を利用することで、英語を「習得」しながら、それを学習の文脈の中で「活用」できた実感を生徒自身が持てたからではないかと推測できる。

文部科学省の有識者会議は、2014 年 9 月、小学校 5・6 学年で英語を正式な教科にすることを新たな提案として行っており（文部科学省有識者会議 平成 26 年 9 月 26 日）、「文字」の活用も含めた英語教育・活動が今後日本の小学校においても議論される可能性が高い。

そこで、今後の日本の初等教育における英語教育の在り方を、文字の活用を視野に入れて考えていく上で、英国の英語教育の導入時において有効な学習方法として取り入れられている Synthetic Phonics（シン

セティックフォニックス）に着目したい。

Synthetic Phonics は、英語の音声と文字を、多感覚（視覚、聴覚、動作）を用いながら連動させ、個々の音声を正しく識別し、その上で、個々の音声を連結（blending）させるといった操作を通して、単語全体の発音を認識していく方法である。生活語彙が豊富な英語母語話者の子どもたちにとっても、連続的な音声情報の中から、個々の単語を構成する音声を正しく認識し、音声の操作を行いながら、単語を聞き取っていくことは、英語学習導入時における音韻認識の向上と読みの基礎的スキルの習得、ならびに語彙の獲得や読みにおいて重要な教育上の課題となる。Synthetic Phonics は、言語体系の大きく異なる日本語を母語とする子どもにとっても有効であることが示唆されている（湯澤・湯澤，2013）。

本稿では、今後の日本における英語学習導入時の学習のアプローチの一つの可能性として、Synthetic Phonics に着目し、英国の英語教育の現状をナショナルカリキュラム（National Curriculum）を中心に概観した後に、英国において 2012 年度、Ofsted（Office for Standards in Education：教育基準局）より最高の評価基準である outstanding を得ているロンドン郊外のある公立小学校における実践を報告し、最後に、日本の英語学習導入期における Synthetic Phonics の可能性を検討する。

Ⅱ 報 告

（1）英国における Synthetic Phonics メソッドの導入

1) ナショナルカリキュラム

英国の義務教育は、5 歳から 11 歳までであり、小学校は、キーステージ 1（以下、Key Stage1）（5 歳～7 歳）とキーステージ 2（以下、Key Stage2）（8 歳～11 歳）から構成されている。1988 年教育改革法（Education Reform Act）の制定により、それ以前、学

校長の裁量に任されていた学習の進展や継続性、一貫性の保障について、全国的な基準が示された。ナショナルカリキュラムでは、学年ごとの学習目標を掲げており、日本の学習指導要領に類似している。しかし、日本と異なり、検定教科書の使用が義務付けられておらず、授業時間数についての細かな規定はない。生徒の学習目標に対する到達は、Key Stage1の最後の7歳時点、Key Stage2の最後の11歳時点で実施されるナショナルテストによって確認される。

ここで得られる生徒の学習目標の到達度を手がかりに、学校側は、生徒一人一人の学力を実質的に保障していく努力が求められるが、ナショナルカリキュラムの実現は、各学校に委ねられており、具体的な教授方法や使

用教材は、学校の方針によるところが大きい。

現在のナショナルカリキュラムの根拠法は、2002年に制定された教育法（Education Act 2002）である。現ナショナルカリキュラムにおいて、教科は、中核教科（Core subjects）と基礎教科（Foundation subjects）に分類されており、前者は、英語、数学、理科の3教科、後者は、歴史、地理、技術、音楽、芸術、体育、外国語、シティズンシップ、コンピュータが該当する。

特に、ここでは、英語学習導入期のあり方を考察するために、2014年9月に改訂されたナショナルカリキュラム（National Curriculum in England: Framework for Key Stages 1 to 4 (2014)）の小学校の英語における学習目標を以下に示す。

表1 ナショナルカリキュラムの英語領域における目的ならびに目標の概要
(English Programmes of Study: Key Stages 1 and 2 in National Curriculum in England 2013 より筆者要約)

目的 (全訳)	英語は、教育ならびに社会において、非常に重要である。優れた英語教育によって、生徒は流暢に話し、そして書くことができるようになる。文章を読んだり、人の話を聴いたりすることで、生徒は他者に自分の考えや気持ちを伝えあい、互いにコミュニケーションを図っていく。特に、読むことを通して、生徒は、文化的、感情的、知性的、社会的、精神的に発達する機会を得る。特に、読み書きはそのような領域において非常に重要な役割を果たす。読みは、新たに知識を獲得することと、既有的知識を広げるといった両面を可能にする。言語に関する全てのスキルは、社会の一員になるために必要不可欠なものである。
目標 (全訳)	<ul style="list-style-type: none"> ・理解にもとづきながら、流暢に読む。 ・読みを、趣味や情報収集に広く活用する。 ・広く語彙を獲得し、読み、書き、話し言葉のための会話に関する文法と知識を理解する。 ・われわれの豊かで多様な文学財産に感謝する。 ・文脈、目的、聴き手に応じて、言語を活用し、文書を、明確に、正確に、一貫性を持たせて書く。 ・学習のために話し合いを行う：生徒は自らの理解や考えを深めそして明確にする。 ・話すこと、聴くことに有能になる：形式的なプレゼンテーションを行い、話し合いに参加する。
話す (抜粋)	<ul style="list-style-type: none"> ・本や読み聞かせに関する感想を他者に伝える。 ・書く前に自分の考えを整理する。 ・安心して話し合いに参加し、考えを表明する。 ・演劇（ドラマ）を通して、多様な役割を演じる。台本を即興で作ったり、工夫する。
読む (抜粋)	<ul style="list-style-type: none"> ・新しい単語を正しくそしてスピーディーに発音し、既知の単語を流暢に読める。 ・フィクション・ノンフィクションの文章を幅広く読み、知識を広げるとともに、生徒が生きている世界についての理解を深める。 ・読みを通して、新しい単語と出会い、語彙を豊かにする。 ・読みを通して、生徒は想像力を豊かにし、関心を広げ、好奇心を満たす。
書く (抜粋)	<ul style="list-style-type: none"> ・綴りを覚え、文字を書く。 ・考えを構音化し、それらを話し言葉ならびに書き言葉の中で構成する。
綴り、語彙、文法、句読点、用語 (抜粋)	<ul style="list-style-type: none"> ・標準英語（Standard English）を用いて、意識的に話し言葉ならびに書き言葉を調整することを学ぶ。 ・綴り、文法、句読点、そして、言語のための言語を理解する。

Phonics に関しては、読みの領域で言及されている。

「両者（新しい単語を正しくスピーディに発音し、既知の単語を流暢に読む）を支えるには、書かれた文字が話し言葉の音声を表すことを理解することである。Phonics が、英語学習を開始したばかりの子どもに対する初期の教授法として強調される所以である」（本文抜粋）

ナショナルカリキュラムの英語において、読み書きは、文化的、感情的、知性的、社会的、精神的な発達を支え、社会の一員になるための必要不可欠なスキルであると定義されているが、読み学習を開始する子どもたちに対して、Phonics がその学習の入り口として有効であることを明確に示されている。

2014 年 9 月施行の現行のナショナルカリキュラムに至るまで、Phonics について、英国は、どのような見解を示していたのか、次に、概観していきたい。

2) ナショナルカリキュラムにおける Synthetic Phonics の観点

英国において、英語の教授法に関しては、過去 50 年の間、複数の立場がとられてきた。

1970 年代以前、広く用いられていたのは、Look-and-Say という教授法であった。これは、単語を覚える際に、何度も見て、形を覚え、書くことを繰り返しながら覚える方法である。1970 年度以降になると、Whole-Language の教授法が主流になる。これは、単語を単独ではなく、文章の文脈の中で存在するものであるとし、文章の前後の内容で意味を予測したり、絵本などでは絵を見てその単語の意味を推測したりしながら、発見的に単語を学んでいく方法である。

1980 年代後半から、読みの到達基準に関して懸念する声が上がりが始め、1989 年

に初めてナショナルカリキュラムが制定された。“Cox Report”（1989）によると、生徒たちが新出単語を読む際、絵、Phonics、文脈、文字の形や文を区切って読むように指導することが推奨されている。1990 年代前半はナショナルカリキュラムの改定が重ねられているが、Phonics はあくまでも上記の新出単語を解説する手段の一つとして扱われるにとどまっていた。

Phonics が英国のナショナルカリキュラムの中で明確に打ち出されるようになったのは、1997 年、総選挙でトニー・ブレアが勝利したことに伴い、政権が保守党から労働党へと移行したときである。労働党は、初等学校における基礎学力形成を重視し、政府は 1998 年度から生徒の読み書き能力を向上させるためのナショナル・リテラシー・ストラテジーを公示し、同年、英国の小学校での英語レベルのうち、読みと書きに特に焦点を置いて授業を行うように通達を出した。翌 1999 年には文章を読むことを強化するために①文法理解、②文脈理解、③単語認識と文字認識、④Phonics という 4 技能をサーチライトとして使ってテキストを読むように指導するように提示し、クラスで Phonics の指導強化を目的に“Progression in Phonics”という教材を公示した（1999）。同年 9 月ナショナルカリキュラムは大幅に改訂された（実施は 2000 年 9 月）。この改訂では、3 歳児から 5 歳児に対する就学前教育が新たに Foundation Stage（基礎段階）と位置づけられると同時に、目標として、①個人的・社会的・情緒的発達、②言語と読み書き能力、③算数の発達、④身近な世界の知識と理解、⑤身体的発達、⑥創造的発達が示された。Phonics に関しては、この Foundation Stage の②言語と読み書きにおいて、言及されている。ナショナルカリキュラムが制定され 10 年経ち、よう

やく Phonics が読みに重要な技能の一つと認識されるに至った。

しかし、当時の Phonics は Analytic Phonics (アナリティック・フォニックス) と言われるものであった。これは単語を最初の文字とそれに続く母音に分割していく方法である。たとえば、man, milk, mother と既知の単語について、共通した音声に類似する m の音であることに着目させ、文字を教えていく教授法である。語頭の学習から、次に、単語の最後に来る文字と音の関係、そして真ん中の文字と音の関係を指導していき、ようやく子音-母音-子音の単語を自分で読み書きできるようにしていく。この Analytic Phonics では、生徒が単語を知っていることを前提としていることから、まずは生徒たちに単語を暗記させてから Phonics を指導するという“Word Recognition (単語認識)”が第一ステップとなっている。

Ofsted は 1998 年から 2002 年の 4 年間のナショナル・リテラシー・ストラテジーの施行調査を行い、その結果 Phonics の指導方法が不十分であることを指摘し、政府は 2004 年に“Progression in Phonics”のサプリメント“Playing with Sounds”を発刊し、ここで従来の Analytic Phonics とは違う Synthetic Phonics の指導に近い教授法が導入された。

Synthetic Phonics とは、生徒の単語の習得に関係なく、Phonics を教える際、文字と音声が一対一対応であることを教え、s, a, t, i, p, n という文字の頻出順に指導し、一つの文字を指導したら、すぐに既習の文字を組み合わせ（Synthesize）読み書きができるようにする教授法である。生徒たちは単語を既習している必要がないこと、文字の最小単位である音素から文字を習得し、速いテンポで文字と音声の関係を学んでいくこと、そして、Analytic Phonics で

は 2 年目に ai, oa, ch, th というように二つの文字で一つの音を作るダイグラフを習うが、Synthetic Phonics では半年以内でこうしたダイグラフも読み書きができるようになるところが大きな特徴である。

1998 年にスコットランドのクラックマナンシャーで 7 年間にわたる Synthetic Phonics の調査が行われた。調査では 300 人の 1 年生の生徒を①Synthetic Phonics ②Analytic Phonics ③Analytic Phonics と音韻認識を指導する 3 つのグループに分け、16 週間のプログラムを実施した。その結果、①の Synthetic Phonics を指導したグループが他の二つのグループより読みでは 7 か月分、スペリングでは 9 か月分も先の力をつけていたことがわかった。その後、すべての生徒に Synthetic Phonics を指導し、7 年間にわたる読み書きの調査を行ったところ、単語を読む能力は 3 年 6 か月、スペリングは 1 年 9 か月、読みの理解力では 3.5 か月分、生活年齢よりも先の力をつけていることがわかった (2005)。この調査で特筆すべき点は、このクラックマナンシャーという地域が社会的にも貧しい地域でフリースクールミールを受けている生徒の割合が多いにも関わらず、これだけの大きな成果を出したことである。この調査は英国に大きな影響を及ぼし、2006 年、教育科学省（現教育省）は、効果的な教育方法に関する調査報告書として、“Independent review of the early reading: Final report (いわゆる“Rose Report”)”を提示し、Synthetic Phonics は生徒たちが読み書きの力をつけるための最も相応しい方法であるとし、英国における Phonics を Synthetic Phonics プログラムで指導するように推奨した。加えて、教育現場で Synthetic Phonics を推進する上で、現場教員のリーダーシップと再教育の重要性を唱えた。

こうした調査結果を踏まえ、2007年に教育技術省（現教育省）は、特に Foundation Stage における Synthetic Phonics の指導に関する具体的なプログラムとして、“Letters and Sounds: Principles and Practice of High Quality”（以下、“Letters and Sounds”）を公表した。この指導書は、Phonics を学校教育の中で展開していくためのものであり、Foundation Stage における Synthetic Phonics による英語学習の具体的な方法を挙げている（表2参照）。こうして、英語教育に関して、Synthetic Phonics が連続的な教授法として教育現場に浸透し始めた。

2014年度ナショナルカリキュラムの改訂に先立ち、教育省は、2013年に“Learning to read through phonics: Information for parents”を公表した。ここでは、保護者に向け、あらためて、英国として、Synthetic Phonics を英語導入の有効な教授法であること宣言するとともに、生徒の確かな Phonics の習得に対して、保育者

の理解を求めた。同文書においては、(1) Phonics とは、どういったものか？ (2) なぜ、Phonics が有効か？ (3) Phonics のスクリーニングチェックとは何か？ (4) “non-words” とは、何か？ (5) Phonics のスクリーニングチェック後の支援、について構成される。「Phonics は、子どもに読みを効率的に着実に教える方法である」とし、調査結果をもとにしながら、「Phonics を構造的な方法で（簡単な音声の学習からはじめ、より複雑な構造へ学習を進める）教授された場合、もっとも有効であること、特に、5歳から7歳の子どもには、特に有効であること」「例えば、ディスレキシアのある子どもたちにとって、“Look-and-Say” というような他の方法よりも、より正確に読むことができるようになること」が周知された。

そして、実際に、これまで英国の小学校で、Synthetic Phonics を浸透させる上で、大きな役割を担ってきたのが、Jolly

表2 Letters and Sounds の Foundation Stage における活動例概要

Phase	内 容
Phase1 (Introduction) 子どもたちが、身近な「音」についての関心を高めていく。	音の識別1－環境 身近な音を探す。 音の識別2－楽器 楽器を使って、様々な音を身体を奏で、それを聴く。 音の識別1－楽器 ボディパーカッションを行っていろんな音を身体を使って奏で、それを聴く。 リズムと韻 韻を踏んだ歌（ナーサリーライム）を歌ったり、詩を聴く。 音声サウンド 動物の鳴き声をまねながら、多様な音声を生出し、それを聴く。 口頭での blending と segmenting よく知っている単語を使って、口頭で blending と segmenting を行う。
Phase2 (6weeks) Phase3 (12weeks) Phase4 (4-6weeks) 文字と音声の学習を行い、blending と segmenting を通して、音韻認識を高める	各 phase 提案されている。各音声を学ぶとともに、マグネットにプリントされた文字を使って、各音声についての認識を深める。 【授業の主な構成】 1) 学習ターゲットの文字と音声の学習 2) 文字の認識と再生 3) 口頭での blending と segmenting 4) よく知っている単語の中に学習ターゲットの文字と音声の学習 5) アセスメント

Learning 社が提案する Jolly Phonics である。Jolly Phonics の特徴は、子どもが、音声に関連するイラスト(視覚)、物語(想像)、音(聴覚)、アクション(動作)、歌、触覚による文字の認識を多感覚的に連動させて、英語の音声と文字を、子どもが楽しみながら学ぶことができる点が特徴であり、多様な教材を開発するとともに、教員向け研修を実施している。現在、Jolly Phonics を教材として採用している小学校は、政府によるヒアリング報告によると 68% に上るとされ (Jolly, 2009)、英国の小学校において、多様な文脈で Jolly Phonics が用いられている。

3) Letters and Sounds

Foundation Stage でいかに子どもたちを Phonics の活動へと意識づけていくかといった点については、“Letters and Sounds” に詳しい提案がある (表 2 参照)。日本の英語学習導入期の具体的な展開への視点として、“Letters and Sounds” の活動例を紹介し、英語学習導入期における授業展開の概要をまとめる。

Foundation Stage においては、子どもが環境と関わりながら、また、音そのものを注意深く聞くといった態度を、遊びを通して育てていくことを主眼に置いている。それと同時に、確かな音韻認識を育てるため、口頭で Blending と Segmentation を繰り返すよう促すことが特徴的であると言える。

(2) Milton Keynes 市における実践報告

英国の教育現場における Synthetic Phonics を用いた教育の現状を明らかにするために、第一筆者は、2014 年 5 月 Milton Keynes 市公立 A 小学校にて、3 つの異なる英語の学習活動を観察し、同校の Literacy Coordinator にインタビューを 1 時間行った。そこでの観察例とインタビュー内容を以下に報告する。

1) Milton Keynes 市公立 A 小学校の概要

当該小学校は、KeyStage1 (Year2) までの学校 (4 歳児入学で 7 歳児卒業) であり、Milton Keynes の中心部の住宅街に隣接する。各学年 1 クラスの小規模校である。フリースクールミールの補助を受けている子どもは 10% と低い。2012 年度の Ofsted の評価によると、Key Stage1 で期待される読みの到達度は、97%、書きの到達度は、93% であり、総合的な評価は、最も高い outstanding であった。

第一筆者が、同校を訪問した時期は、2014 年 5 月であった。訪問中、授業参観を行うと同時に、クラス教師へのインタビューを実施した。以下、2) クラス活動、3) 小集団支援、4) 個別支援に関しては、授業参観の様子を報告し、5) ドキュメンテーションと宿題、6) 教師・TA の連携については、インタビューから、概要をまとめる。当該校は、Jolly Learning 社製の教材を英語教材として採用している。

2) クラス活動

Foundation (5 歳児) クラスでの、授業参観を行った。クラスでは、“ai” サウンドの学習場面であり、授業の流れは、以下の通りであった (写真 1 参照)。

教師は、クラス担任一名であった。まず、ホワイトボードに、“train” とプリントされた文字カードを貼り、今日は、“ai” の音声を学ぶことを伝える。この際、用いられる文字のフォントは、Jolly Phonics が推奨する Precursive (半筆記体) フォントである。筆順を考慮したフォントを用いることで、書きを意識した学習を行うことができること、そして、授業で用いるフォントを統一することで、生徒の視覚的な混乱を防ぐことがその目的である。プリントを提示した際、“t” の音が、“ch” と異なることを復習する。子どもたちは、“t” の音

と“ch”の音の違いを、アクションを交えて発表する。

Jolly Learning 社製の Big Book という教材を教師は広げ、絵だけが提示されたそのページを開き、お話をする。この教材は、学習目標となる音声に焦点化した絵が描かれており、当該音声を含む単語が意味ある文脈で描かれている。教師は、この絵を、口頭で解説していきながら、繰り返し、学習目標となる音声を繰り返し発声することとなり、生徒はその音に慣れていく。

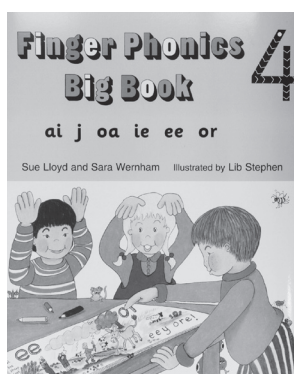


図1 Jolly Learning 社製 “Finger Phonics Big Book 4”

その後、Big Bookの中から、“ai”を含む単語を生徒が見つけ出す。同書の場合は、train, pain, chain 等の絵が描かれており、子どもはそれを見つけてだして、発表し、生活語彙を音声的言語として結び付けていく。

学習目標となる音声は、多感覚を用いて学習される。“ai”は、耳が聞こえにくい様子を表すために、子どもは、耳の調子が悪く診療所にいる。目のドクターが聴診するが、発話の内容が聞き取れず、子どもが“ai”と聞き返す場面を、再現している。

その後、Blending といった音声と音声を繋ぎ合わせて、単語・非単語を作っていくといった音韻認識を高める活動を行う。個別の音をゆっくり発音していきながら、その音声同士の発声を次第に早めていき、一つの単語を構音化する。

表3 2014年5月6日A小学校 Foundation (5歳児) クラスの授業構成時の授業プラン

概 要	教師の働きかけ
1) 学習目標	“train”を例に挙げ、本日の学習が、“ai”であることを伝える。
2) 学習する音を意味的なストーリーから理解	Jolly Learning 社製の Big Book を用いて、“ai”に関するストーリーを提示する。
3) 学習する音を含む単語への意識化	Big Bookの中から、“ai”のつく単語を探すよう促す。
4) 学習する音に関する多感覚な学び	“ai”のアクションをみんなでを行い、音とアクションを結びつけ、提示する
5) 学習する音に関する音韻的操作	r n p ai の4つの音声 (r,n,p については、学習済) を利用して、音声を連結 (Blending) する課題を行うよう促す。 ・方法の説明 ・無意味語 (キャッチフレーズは、エイリアン単語とする) を提示し、無意味語をつくる。 ・有意味語をつくる
6) 学習の振り返り	本日学んだ、“ai”音声について、多感覚を用いた振り返りを行うよう促す。

音韻的操作を行う場合も、教材として、4つの音声が入った正方形の小型のカードを子どもたちは、自分の教材ボックスから取り出す。活動の後、その個人の教材ボックスにしまうが、手で具体的に個別の音声カードを操作しながら、複数の音声を構音化する作業において、このカードは記憶の補助としても役立つ。

音声を学ぶ際の授業構成は、おおよそ、表3に示す組み立てで一貫しているとのことである。授業の進め方が毎回異なる場合、特に、学習に躓きを見せる子どもにとって、教師の指示に従うことに活動中に認知的コストを奪われてしまうため、課題に失敗することが多い。シンプルな授業展開は、全ての生徒に対して、分かりやすい授業と言え、同校はそれを実践している。

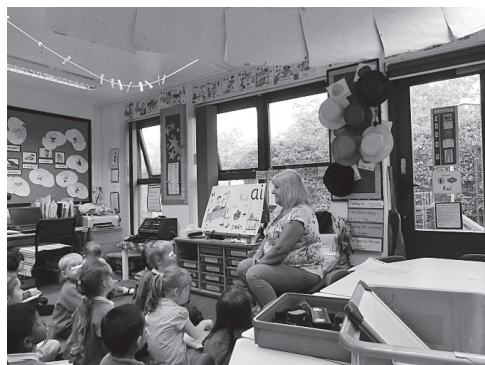


写真1 クラス授業の一場面

3) 小集団支援

教師は、学習支援サポーター（TA）であり、英語の学習に躓きがあると教師によってアセスメントされた8名の生徒がそこに参加した。子どもたちは、Foundationクラスの子どもたちであった。教材室を兼用している一室のコーナーで行われた。一つのテーブルを8人が取り囲み着席のまま進められた（写真2参照）。

当日の授業は、クラスですでに学習した“u”の音声についての確認が中心であった。まず、“u”のカードを教師が見せ、子どもがそれを音声ならびにアクションで示した。

表4 2014年5月6日A小学校Foundationクラスの小グループ授業の授業プラン

概要	教師の働きかけ
1) 学習目標	“u”の復習であることを伝える
2) 学習する音声の多感覚的な復習	“u”に関する音声化・アクション、空書きを通して、多感覚的な復習を促す
3) 学習する音声を含む語彙の習得	視覚教材を用いて、生徒の生活語彙から“u”を含む単語を選定できるよう促す。
4) Tricky wordの学習	“you” Phonicsの規則に一致しない理由を提示し、実際の読み・書きの学習を促す。

学習目標となる音声は、“u”は、傘(umbrella)の語頭音に着目したものであり、傘を開く動作とともに覚えていく。

ここでの授業では、教師の口を良く見て、音声を正確に再生することが主な目的であった。

したがって、教師は、最初の振り返りの場面で、何度も、“Look”と口を指さし、口の動きを注意深く見るよう生徒を促していた。

“u”について、正確に音声化し、空書きをして、筆順や書き方を確認しながら、多感覚的に復習した。

次に、生徒自らの生活語彙に着目しながら、“u”を含む語彙を探し、意味と音声とのマッチングを行う。ここでは、教師は、生徒に自由に発表をさせると同時に、回答が出なくなった場合は、自分でホワイトボードに絵を描いて、“u”を含む語彙を探し出す活動を行った。

最後に、Tricky Wordとして、“you”を取り上げていた。“you”は、Phonicsに従うと、yとouもしくは、y,o,uといった3つの音声の連結の可能性があるが、実際の音声は、yとouとからなり、このouがとなり、“oo”と発音が同じになる。こうした、Phonicsの規則に従わないものを、Tricky Wordとして、適宜、解説を加えていく。こうしたTricky Wordは、身近な語彙を中心に補足的に伝えていくものである。Tricky Wordの規則性について、生徒はある程度理解できると、それを、他の単語の学習にも応用する。



写真2 グループ学習における一場面

4) 個別支援

教師は、学習支援サポーターであり、英語の学習に特に躓きがあると教師によってアセスメントされた2名の生徒に対して、授業開始の20分を利用した個別支援を行っていた。場所は、教室に面した共有スペースにある机であった（写真3参照）。

当日の支援は、これまでクラスですでに学習した音声の振り返りを、複数のカードを用いて行った。

まず、教師は、静かに音声を聴くことの大切さを尋ねる。生徒は、「きちんと音声を聞き取ることができるため」と回答する。

当日の短いセッションでは、ターゲットとして、これまで学習してきた音声の複数を行うことを伝える。教師が、子どもたちが未習得と思われる音声について、繰り返し、発声する。子どもたちは、音声とアクションで答える。正解した場合、教師からカードを受け取り、手元のボードに、カードを並べていった。

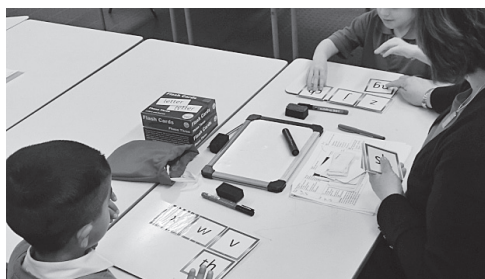


写真3 グループ学習における一場面

5) ドキュメンテーションと宿題

教師は、生徒ごとに、宿題ならびに授業で用いたワークシート、Phonicsの確認用のアセスメントシートをファイルに綴じた学びのドキュメンテーションを作成している。保護者の個別面接の時間等に、生徒の学びについて、説明を行う。

ドキュメンテーションの利点は、いくつかある。一つ目は、教師やTAがチーム

となって、子ども一人ひとりの学びの状況を確認するのに役立つ。学習上の躓きを示す子どもは、複数の機会を利用しながら、個別の支援を受ける。その際、クラス教師だけでなく、複数のTAはともに子どもの学習状況を把握していく必要がある。二つ目は、アセスメントと生徒の学習プリントを総合的に判断することで、生徒の課題を一体的にとらえていくことができる点である。アセスメントは、Phonics Soundsの学習到達の状況であり、学習のプロセスについては、把握しづらい。一方、学習プリントにおいては、子どもの誤りパターンを知ることができる。例えば、構音的な問題あるいは書きに問題を抱えている場合、子どものプリントから把握できる。したがって、子どもの学習上の躓きを理解できる上で有効と言える。そして、三つ目は、具体的な資料をもとに、保護者に子どもの学習状況や学校での教育的立場を説明できる点である。具体的には、子どもが書いた作文は、初期の頃は、Phonicsに従って書くと、単語等の誤りが多い。しかし、それは、学習上重要なステップであることを伝えていくと同時に、今後の学習の成果として、Tricky WordsをPhonicsを通して、あわせて学習するにつれて、正しい英語を書くことができるようになることを伝えることができる。また、nonwordを用いた学習は、Phonicsの教授法の中でも、重要な活動として位置づけられているが、保護者にとっては理解を得られにくい。特に、こうした誤りを認めることが重要であることを、現在のSynthetic Phonicsによる手法で英語を学んでこなかった保護者に、丁寧に説明する必要がある。その意味でドキュメンテーションは、役立つとされる。実際、教育省が保護者向けに出した“Learning to read through phonics: Information for parents”の中にも、non-wordを用いるこ

とで、子どもは、音声を分析していくこと(decode)のスキルを高めることが解説されている。

宿題についても、日本の教育と同じように、毎日の学習の積み重ねが必要となるため、家庭でのサポートは必要となる。宿題としてワークシートを持ち帰ることもあるが、加えて、低学年までは、子どもが借りた本を家庭で読み聞かせることが英語学習の土台となりえるものであり、そうした必要性を、保護者に伝えていくことで、家庭と連携していきながら、生徒の英語学習を有機的に支えている。

6) 教師・TAの連携

学校内に、Literacy Coordinatorの役割を担う教師を配置し、子どもの学習状況を把握していく。Phonicsに関しては、教師も研修を重ね学ぶ必要がある。しかしながら、学校で生徒の教育・支援を行うスタッフのうち、TAなどは、研修の機会は少ない。したがって、当該校においては、Literacy Coordinatorが、Phonicsの研修に参加するなどし、教授システムを学ぶとともに、TAなどにその教授法を伝えていく役割を担っていた。また、Phonicsに関する教材室があり、Jolly Learning社製の教材に加え、生活語彙に関わる小物や、教師・TAが製作したSynthetic Phonics教材が整理されており、教師・TAが共有できる環境が整えられていた。これは、情報を共有することで、知的リソースを集約し、学習においても、また、教師・TAの自主研修としても役立てることができる。

Ⅲ まとめと日本の英語導入時におけるSynthetic Phonicsの可能性

本稿では、英国の英語教育の現状について、ナショナルカリキュラムを中心に概観した。結果、英語の読みにおいて、

Phonicsの重要性がナショナルカリキュラムで指摘されながらも、教育現場では、Analytic Phonicsが指導されていた。1998年からの7年間にわたるクラックマンランシャーの調査により、ようやく2006年にSynthetic Phonicsの具体的な指南書が提示されるとともに、2013年、読みにおけるPhonicsの教授法の有効性が改めて国家として保護者に周知された。そして、2014年9月の新ナショナルカリキュラムの実施に至る。Synthetic Phonicsの有効性は、1989年以降様々な教授法を通して多角的に検討された結果(et al., Glazzard & Stokoe, 2013., Johnston. & Watson, 2007., Wyse & Styles, 2007)英国の英語教育の導入の土台をなすようになった。

後半、英国において2012年度、Ofstedよりoutstandingの評価を得ている公立小学校の教育実践を報告した。ここでは、Jolly Learning社製の教材を中心としながら、個々の音声・文字について、多感覚で学ぶと同時に、普通学級、学習に躓きにあるグループ、個別指導の場においても、繰り返し、音韻認識を育てる活動について報告した。

日本における英語学習の導入への示唆は、以下の点がある。英語の音声の正しい認識が、言語情報を分析していく上で基礎となり、学習の初期にこそ行うことの重要性を指摘している英国の立場は、日本語を母語とする生徒に対する教育にとっても示唆的である。湯澤・湯澤(2013)は、日本語を母語とする子どもたちに、Synthetic Phonicsのプログラムを実施しているが、同プログラムが、新たに聞く英単語の知覚を正確にすることを示している。英語は日本語と大きく言語の構成が異なることに加え、子音が音声の単位となる。通常、子音と母音が連結した拍を音の最小単位とする日本語母語話者にとって、識別は難しい(湯

澤, 2011)。その難しさを置き去りにしたまま、言語の学習を進めることは、子どもを音の洪水の中に身を置かせるにすぎず、子どもにとっては理解ができない世界として、外国語活動や英語学習の時間を捉えさせる可能性がある。実際、日本語を母語とする生徒は、音声を個別に認識する音韻認識の能力は、高く（湯澤, 2011）、こうした能力を活かすといった意味でも、Phonicsの教授法は、日本語を母語とする生徒の特性とも適合する。

本報告は、読みの基礎として Synthetic Phonics を紹介したものであるが、これが、コミュニケーションの文脈と大きく異なる印象を与えかねないことが危惧される。しかしながら、教師と生徒のやり取りにおいて、Synthetic Phonics で大切にしていることは、「人の話をしっかり聴く」態度であり、これは、コミュニケーションの重要なスキルの一つである。また、参観授業において、「あなたは どう思う?」「私は、こう思うよ」といったグループ活動でのやり取りを頻繁に行っており、コミュニケーションは、必然であった。生きたコミュニケーションとは、生徒同士が、自分の考えを伝え合うことにより成り立つものであり、Synthetic Phonics を中心とした授業の中で、いかにコミュニケーションの文脈を生み出すかといった点については、授業者の工夫によるところが多い。

依然、日本における外国語活動では、「文字不要論」の議論が高い。しかし、英語を学び始める子どもたちにとって、どういった学習の道筋が、「分かる」授業に繋がり、その後の英語学習への関心を方向づけることができるのかといった点に真摯に向き合う必要がある。Synthetic Phonics を通して、英語の音声に関する音韻認識を高める活動を十分に行い、日本語にない子音の発音を促し、楽しみながら学ぶ体験を通し

て、英語の語彙を積み上げていくといった英語学習の確かなスタートこそ、今後の日本における英語学習の導入期の在り方として検討されるべきであると筆者らは考える。

引用文献

- Department for Education (2013) English programmes of study: key stages 1 and 2 National curriculum in England.
- Department for Education and Skills (1999) The National Literacy Strategy Phonics Progression in phonics: materials for whole-class teaching. London.
- Department for Education and Skills (2004) Playing with sounds: a supplement to progression in phonics.
- Department for Education and Skills (2007) Letters and Sounds: Principles and Practice of High Quality Phonics.
- Department of Education and Science and the Welsh Office (1989) The Cox Report (1989) English for ages 5 to 16
- 英語教育の在り方に関する有識者会議（第7回）議事録(2014年8月8日実施) (http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/gijiroku/1351822.htm 2014年11月11日現在)
- 英語教育の在り方に関する有識者会議（第8回）議事録(2014年9月26日実施) (http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/gijiroku/1352267.htm 2014年11月11日現在)
- Glazzard, J. & Stokoe, J. (2013) Teaching Systematic Synthetic Phonics and Early English. Critical Publishing Ltd.
- Jim Rose (2006) Independent review of the teaching of early reading: final report, Department for Education and Skills.
- Johnston, R. & Watson, J. (2007) Teaching

- Synthetic Phonics. SAGE.
- Jolly. C. (2009) Ev256 in National Curriculum: Forth report of session 2008-09 Volume II Oral and Written evidence, House of Commons The Children, Schools and Families Committee.
- 君塚淳一・西尾直美・田中智子 (2010) 小
学校英語における課題を考えるーphonics
の効用と課題(1) 茨城大学教育実践研究,
29. 137-147.
- Parliament of the United Kingdom. (2002)
Education Act. 2002.
- School Curriculum and Assessment
Authority (1994) The Warwick Evaluation
(1994) Evaluation of the Implementation
of English in the National Curriculum at
Key Stages 1, 2 and 3 (1991-1993).
- Scottish Executive Education Department
(2005) Insight 17 A Seven Year Study of
the Effects of Synthetic Phonics Teaching
on Reading and Spelling Attainment.
- Wyse. D. & Styles. M. (2007) Synthetic phonics
and the teaching of reading: the debate
surrounding England's 'Rose Report'.
Literacy Volume 41 (1) pp. 35-42.
- Wernham. S. & Lloyd. S. (2010) Jolly Phonics
Teacher's Book. Jolly Learning Ltd.
- Wernham. S. & Lloyd. S. (2010) Finger
Phonics Big Book 4. Jolly Learning Ltd.
- 湯澤正通・湯澤美紀 (2013) 日本語母語幼
児による英語音声の知覚・発声と学習: 日
本語母語話者は英語音声の知覚・発声が
なぜ難しく, どう学習すべきか. 風間書房.
- 湯澤美紀 (2011) 日本人幼児の母語習得と
英語習得の相互的な影響, 教育と医学,
慶應義塾大学出版会